

池田家文庫には、近世岡山の歴史・文化・暮らしが記録されています。

探訪・池田家文庫

国立大学法人

岡山大学

池田家と岡山藩

岡山大学附属図書館には、一般の図書とは別に、多数の「貴重図書」が所蔵されています。そのなかでも最も有名なものが、「池田家文庫」です。

現在の岡山県は、八世紀の律令制以来の地域区分でいえば、備前・備中・美作の三つの国からなっていました。江戸時代、このうち備前国一国と備中国の一部に領地を与えられていた大名が池田家で、その居城が岡山にあったため、一般には岡山藩と呼ばれています。池田家の一族

探訪・池田家文庫(1)

で最初の岡山城主となったのは、姫路城主池田輝政の二男忠継でした。

池田家は、美濃国池田郡池田庄(現、岐阜県池田町)出身の土豪とされています。その後、尾張国に移って織田家の武将として活躍します。輝政は、豊臣秀吉によって三河国吉田城(現、愛知県豊橋市)を与えられますが、徳川家康との結び付きも強く、家康の二女富子(良正院)を後妻に迎えます。関ヶ原の戦いでは、徳川方として奮戦し、その功績によって播磨国に五二万石を与えられ、姫路に移りました。白鷺城の名で知られる姫路城は、輝政が築いたものです。

関ヶ原の戦いの後、岡山城には小早川

秀詮が入っていました。二年後に急死。跡継ぎの子どもがなかったために断絶となり、富子を母とし、家康の孫に当たる忠継に備前国を与えられたのでした。一六〇三(慶長八)年のことです。



池田家文庫の成り立ち

以後池田家の一族が岡山城主となり、一八七一(明治四)年の廃藩置県まで、岡山藩主を勤めます。その間に、岡山藩の行政で使われた膨大な史料が、明治以降も池田家に伝えられました。一九四五(昭和二〇)年六月二十九日の岡山大空襲によって、岡山市街は文字通り焼け野原とな

りましたが、池田家事務所の土蔵に納められていた美術品と史料類は奇跡的に焼失を免れました。

一九四九年、戦後復興をめざす地元岡山の人々の熱い思いに支えられて、岡山大学は創設されます。地元による支援の中心となったのは、「岡山大学設立期成会」でした。この「期成会」によって、新しい大学の教育・研究条件の整備のために、さまざまな援助がおこなわれました。

池田家の大量の史料類の大学への移管も、池田家のご好意と「期成会」のご助力によって実現したものでした。以後、池田家文庫は本学での教育・研究活動に大いに役立てられています。また、岡山地域はもとより、日本全国や外国の研究者にも広く利用されています。

池田家文庫は、岡山藩政史料約八万点、絵図類約三千点、近代の池田家関係史料数千点、和漢の古典籍約三万二千冊からなる一大コレクションです。次回からは、その内容を分野ごとに紹介したいと思います。



教授 かつなお直 倉地 文字部



重要文化財「信長記」

池田家文庫には、国の重要文化財に指定された「信長記」全十五巻があります。この書は、戦国乱世を統一した織田信長の伝記で、著者は太田和泉守牛一です。彼は信長や豊臣秀吉に仕えた武将でしたが、晩年には隠居して、信長や秀吉の活躍を「軍記」として書き残しました。「信長記」はその代表的な著作で、数ある信長の伝記のなかでも、最も正確で史料価値の高いものといわれています。

探訪・池田家文庫(2)

「信長記」は、信長が上洛した一五六八（永祿十二）年から、本能寺の変で彼が亡くなる一五八二（天正十）年までの十五年間を、各一年を一巻にあてて書かれています。現存する「信長記」には太田牛一の自筆本がいくつもあり、これが原本として重視されています。池田家文庫のものも、その自筆本の一つで、一六一〇（慶長十五）年に池田輝政の求めに応じて書かれたことが分かっています。

池田輝政の青春

池田家文庫本の「信長記」には、ほかにはない特徴が二つあります。

一つは、一五八〇（天正八）年の撰津花熊城（現・神戸市中央区）の合戦において初陣を飾った池田幸新（のちの輝政）が、父勝三郎（恒興、のちに信輝）や兄勝九郎（之助）とともに功名をあげ、信長から「感状」をもらったことが書き加えられていることです。もう一つは、天正十年に織田勢が甲斐国の武

田氏を攻めた陣立てのなかに、兄勝九郎とともに池田幸新の名前が書き加えられていることです。これらはいずれも、輝政が自分の名前を「軍記」に残そうと、牛一に依頼したものと推定されています。一五八四（天正十二）年、小牧長久手の合戦で父信輝と兄之助がともに討ち死にし、輝政は二十一歳で池田家を一身に担うこととなります。その後の



「信長記」

輝政の人生は、苦勞の連続でした。しかし彼自身の努力と徳川家康の後援によつて、姫路五十二万石の大大名にまで成長します。慶長十五年、輝政は四十八歳になっていました。池田家の子孫たちに、これまでの苦勞を伝えたいと考えたのでしよう。「信長記」は、輝政の青春の記念碑となるものだったのです。

信長の恒興宛朱印状

先に触れた信長の「感状」は、池田家文庫には残念ながらありません。信長の文書は、一五七三（天正元）年九月七日付けの池田勝三郎（恒興）宛朱印状一通が残るのみです。内容は、それまで勝三郎が知行していた木田小太郎跡職を、息子の古新（輝政）に譲与することを認め、安堵するというものです。当時恒興は尾張犬山城主で、輝政は十歳にな

ったばかりでした。信長は、八月に越前の朝倉義景と近江の浅井長政を滅ぼしたところでした。九月には伊勢国長島の一向一揆への攻撃を開始します。天下統一の事業には、諸大名の協力が欠かせません。譲与の安堵は、頼みとする池田家の安泰を図る措置だったのでしよう。「天下布武」の信長の朱印が押されています。

池田家が大大名へと成長していく過程を示すこうした史料も、池田家文庫にはいくつが含まれています。



信長朱印状

「名君」池田光政

岡山藩といえは、「名君」池田光政のことを思いつきます。

光政は、慶長十四（一六〇九）年、輝政の長男利隆の子として岡山城に生まれました。しばらくして、父利隆とともに姫路に移り、元和三（一六一七）年に利隆が没すると、八歳でその跡を継ぎました。しかし、幼少を理由に鳥取に転封になります。さらに、寛永九（一六三二）年に岡山城主であった池田忠雄（輝政三男）が没すると、その子の光伸が三歳と幼少であったため、再

「留帳」と「奉公書」

池田家文庫の藩政史料は、ほとんどがこの光政以降のもので、彼の時代に藩政が確立し、史料作成の仕組みも整えられたからです。

光政時代から作られている史料に、「留帳」があります。これは、藩政を知る基本史料で、藩主や家臣の動向、儀式や賞罰、諸法令、諸職交替、宗教、教育など、藩政の重要事項が書き上げられています。一年に一冊（ときに二冊）作られ、承応三（一六五四）年から明治二十七（一八九四）年まで、約三四〇冊が残っています。

探訪・池田家文庫(3)

「留帳」を作成したのは、「留方」という役職でした。

一族同士の国替えが行われ、光政は岡山城に帰って来たのでした。ときに二十四歳でした。

それから寛文十二（一六七二）年に家督を譲るまで四十一年間、光政は岡山藩主を務めます。その間に三回の大きな「改革」を行い、藩政の確立に努めました。儒教の「仁政」の理念を掲げ、率先垂範、よく「働く」藩主でした。熊沢蕃山を取り立てて儒学を学び、藩内の教育にも力を入れました。こうした事績から、後に「名君」と言われるようになりました。

「留方」は、藩の記録の作成や保管にあたりました。彼らは、藩の最高評議機関である「評定」に陪席し、その評議の内容を書き記し、「評定書」という記



「留帳」



「奉公書」

録も作っています。藩の各部署からも書類が廻され、それが「留方」で整理されていました。

「留方」が作成・整理した史料でもう一つ重要なものは、「奉公書」です。これは、池田家の家臣が、先祖の出身や池田家に仕えた由来、代々の奉公の様子などを書き上げたものです。書き上げが始められたのは光政の時代で、のちには五年ごとに書き上げを提出するようになり、明治期まで続きました。現在、三〇〇〇家以上の約三五〇〇冊が残っています。家臣の家のことはもとより、藩政についても多くの情報を得ることできる史料です。

「御諫箱之書付」

「働く」藩主であった光政は、自筆の「日記」を残したことで有名ですが、藩政についての書付も多く残っています。「御諫箱之書付」もその一つです。承応三年から始まる「改革」のなかで、光政は「御諫箱」を設置します。これは、

藩主に対する諫言を家臣や民間から投書させるもので、城内と城下の二ヶ所に設置されました。光政はすべての投書に目を通し、要旨を書きとった自筆の書付を作ったのです。その量は、十二年分七冊になります。投書に基づいて役人を現地へ派遣し、不正を働いた藩の役人や庄屋たちを、実際に処罰した記録も残っています。光政の政治姿勢を知ることができ、当時の藩政の状況も分かる大変興味深い史料です。

（文学部教授 倉地克直）



「御諫箱之書付」

光政と蕃山

岡山県は、長野県と並んで教育県だとよく言われます。この地域での教育の普及には、やはり岡山藩の池田光政がかかわっていました。

岡山城に戻って一〇年くらいして、光政は第一回目の「改革」に取り掛かります。しかし、思うように進みません。家臣たちの意識がバラバラで、自分が説く「仁政」理念を理解できないのが原因だと、光政は考えます。そんなときに、家臣のなかに熊沢蕃山を見出します。蕃山は、少人数の仲間と儒

連載

探訪・池田家文庫(4)

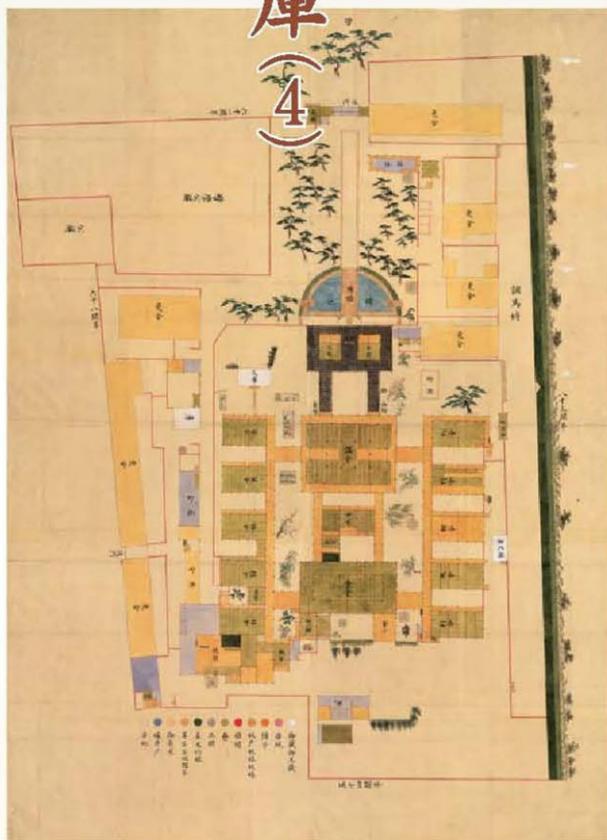
学の学習を行っていたのですが、その話を聞いた光政が、蕃山の考えに共感したのです。

光政は、早速蕃山を抜擢し、城下町のはずれにあった「御花園」に土地を与え、ここで儒学の講習を行うようにさせました。家老をはじめとした家臣たちに、蕃山のもとで学習するように勧めます。高等学校の日本史の教科書などに、岡山藩の藩校として「花園教場」という名前が出てきますが、正確ではありません。実際には藩の公式の学校ではなく、蕃山を中心とした私的な学習結社で、会の名称も「花園会」であったと考えられます。

岡山藩学校

承応三(一六五四)年から始まる第二回目の「改革」では、熊沢蕃山や「花園会」に集まった家臣たちが、大いに活躍します。彼らは光政の手足となって領内を廻り、役人の不正を追及した

京都から招かれた朱子学者たちでした。学校の敷地は、現在の中央中学校のあたりで、遺構としては泮池が遺っています。以後、藩学校は明治四(一八七一)年の廃藩置県まで続きます。日本でも最も古く、確立した制度を保持し、途切れることなく教育活動を行った藩



藩学校図

り、困窮した農民を救済したりしました。

寛文年間(一六六一―一七三二)の第三回目「改革」では、光政は長年の希望であった藩学校を創設します。まず寛文六(一六六六)年に仮学校を取り立て、同九年に正式に学校を開設しました。開校式を主催したのは熊沢蕃山でしたが、日常的な教育にあたったのは、

校です。

池田家文庫には、藩学校の様子を示す絵図が多数遺されています。岡山藩学校の中心には、孔子を祀る聖堂と講義を行う講堂があり、周りには生徒が寄宿したり学習したりする建物や学校奉行をはじめとした関係者の住居などが立ち並んでいたことが分かります。

閑谷学校

開校時の生徒は、家臣の子弟が約一四〇人。それ以外に、一般庶民の子弟が五〇人ほど給仕として雇われており、彼らは仕事の合間に講義を受けました。家臣の教育とあわせて、当初から一般庶民の教育にも力を入れていたことが、岡山藩の教育の大きな特徴です。

岡山藩の庶民教育機関としては、閑谷学校が有名です。藩学校が創立されたところから、領内各地には「郡中手習所」が設置されていましたが、これが徐々に統合されて、最終的に閑谷学校に集約されました。現在の閑谷学校の建物が建てられたのは、光政の子の池田綱政の時代です。



備陽国学記録

池田家文庫には、「備陽国学記録」という史料が六十九冊遺されています。これらから、藩学校や閑谷学校での教育活動について、詳しく知ることが出来ます。

(文学部教授

倉地克直)

岡山後楽園

他の地域の人に岡山のまちを紹介するとなると、まず思い浮かぶのが岡山後楽園です。日本三名園の一つに数えられる回遊式庭園（中心の池泉を回りながら觀賞する庭園）で、四季折々の自然の美しさが楽しめます。いつ訪ねても、心が安らぐところです。

後楽園の造営を命じたのは、二代岡山藩主の池田綱政でした。当初は、藩主がくつろぐための御茶屋とその周辺の庭だけのこぢんまりしたものでしたが、次第に敷地が拡張され、元禄十三（一七〇〇）年に、ほぼ現在の規模になりました。

庭園内部の構成は、代々の藩主の好みによってたびたび変えられました。池田家文庫には、多数の後楽園の絵図が残されていて、変化の様子をたどることが出来ます。その一枚である文久三（一八六三）年の絵図には、梅・桜・藤・楓などが、色鮮やかに描き分けられており、沢の池や芝生には鶴も描かれています。

御後園諸事留帳

後楽園は、当時は「御後園」と呼ばれ、御後園奉行をはじめとした藩の役人たちが住み込んで、管理に当たっていました。この役人たちが書き記した記録が、「御後園諸事留帳」です。池田家文庫には享保十七（一七三二）年から明治五（一八七二）年までの一二三冊が残っています。これによって、御後園の利用の様子を詳しく知ることが出来ます。

庭園は、行楽と接待の場所でした。能・蹴鞠・和歌などが楽しめます。剣術・弓術・騎馬などが行われました。儒学の講義や仏事が営まれることも



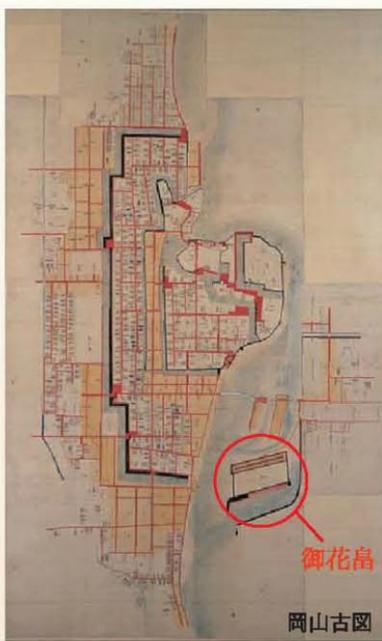
御後園諸事留帳

ありました。また、庭園では、穀物や野菜、花卉や果樹などの栽培も行われました。毎年の田植えには、周辺の農村から子どもたちが参加しています。特筆すべきことは、御後園では、江戸時代から一般庶民への公開が行われていたことです。十八世紀の中頃に、三代藩主の池田継政によって始められたもので、藩主が参勤交代で岡山を離れている時期に行われました。一か月に六日と日を定め、男女を分けて、入園が許されました。ときには、一日に数千人の拝見があったこともありました。どちらかというと女の人が多いかっただけです。拝見者は行儀良くするように注意され、園内での弁当・茶・煙草は禁止されていました。

岡山城下町絵図

御後園ができる前は、藩主の遊楽の場所は「御花島」でした。旭川の京橋の南にできた中洲に作られたもので、池田忠雄が庭園を営んだといわれています。のちに池田光政は、ここに二代將軍徳川秀忠を祀る台徳院御霊屋を作り、さらに熊沢蕃山に屋敷地を与えます。そこで蕃山が「花園会」という学習結社を主宰したことは、前回ふれました。その後は、台徳院御霊屋も郊外に移され、家臣の屋敷や藩の役所の小屋などに利用されます。こうした「御花島」の変化は、岡山の城下町絵図で確かめることができます。

池田家文庫には、各時期の岡山城下町絵図があり、江戸時代を通じてまちの変化をたどることが出来ます。最も古い絵図は忠雄時代のもので、光政が岡山に転封になったときに譲られ、家臣の屋敷割りに使った興味深いものです。



岡山古図

（文学部教授 倉地克直）

連載

探訪・池田家文庫(5)



文久三年御後園絵図

江戸時代の外交

江戸時代は、一般に「鎖国」の時代といわれ、国をとぎしていたように思われています。しかし、これはヨーロッパ諸国を基準にした見方であり、実は、当時もアジアの国々とはさまざまな関係が持たれていました。朝鮮・琉球は「通信の国」といわれ、正式の外交関係がありました。中国・オランダは「通商の国」とよばれ、定期的な貿易が行われていました。アイヌとの交流・交易も蝦夷地で行われていました。とくに重要だったのは、朝鮮との外

府中（蔵原）で歓迎を受けたあと、対馬藩主とともに江戸に向かいます。大坂までは海路をとりました。使節一行が通行する間、安全を確保したり、食料を提供したりすることは、日本側の責任でした。各地の有力大名は、その役目を分担しました。主な宿泊地で

探訪・池田家文庫(6)

交です。両国の関係は、豊臣秀吉の朝鮮出兵によって断絶しましたが、その後、関係者の努力で改善にむかい、国書の交換が行われるまでになりました。

江戸時代を通じて、あわせて二回朝鮮使節が、徳川将軍のもとに送られました。その使節は途中から「朝鮮通信使」とよばれるようになり、将軍の代替わりごとに派遣されました。

朝鮮通信使と岡山藩

通信使の一行は、約五〇〇人。朝鮮の釜山を六艘の船で出発します。対馬の

は、使節の饗応も行われました。

岡山藩は、備後の鞆（広島県福山市）から播磨の室津（兵庫県御津町）までの間を担当しました。領内の牛窓（瀬戸内市）では、使節らが上陸し、盛大な宴会が催されました。この接待は国家的な行



朝鮮人御用留帳



牛窓町筋絵図

事でしたから、慎重に行われました。間違いないように、藩としての記録も作られました。それが池田家文庫に残されています。なかでも享保四（一七一九）年度の「朝鮮人御用留帳」一七冊がまとまったものです。これには、幕府や対馬藩とのやりとりをはじめ、接待の様子が詳しく記されています。

牛窓での接待の中心は、藩の御茶屋でした。この建物は一二〇〇mほどの大きなもので、ここで使節を饗応する宴会が行われました。この建物の図面も池田家文庫にあります。また、他の通信使一行のために多くの町屋が利用されましたが、その図面一式も延享五（一七四八）年度のものが残っています。正徳元（一七一）年度の接待時の牛窓の町割りを示

朝鮮八道図

朝鮮通信使は、一〇年から三〇年に一回は瀬戸内海を通行しましたから、岡山の人びとは、朝鮮の国や人についてある程度の知識を持っていたと思われます。池田家文庫には、極彩色の「朝鮮国図」が二枚残されています。朝鮮の八つの道（行政区）を色分けして示し、主な都市を四角に枠囲いしています。いわゆる「朝鮮八道図」です。



朝鮮国図

江戸時代、対馬藩は外交と交易のための役所を釜山に置いていました。これを「倭館」といいます。この「朝鮮国図」には、釜山に「対館」が描かれています。「倭館」のことです。朝鮮の「八道図」を参考に、日本で作られた絵図だと思われれます。岡山藩での朝鮮に対する関心を示すものとして貴重です。

（文学部教授 倉地克直）

※池田家文庫に関する連載は、今回で終了します。次回からは新連載となります。

池田家文庫は、江戸時代に岡山藩主であった備前池田家が所蔵していた藩政資料（古文書・絵図・和書・漢籍）のコレクションです。これらの資料には、寛永9年（1642）に池田光政が鳥取から岡山城に入って以降、明治維新後の廃藩置県（1871）までの岡山藩政に関するあらゆる分野の情報が蓄積されています。この冊子は、岡山大学広報誌「いちよう並木」（岡山大学発行）25号から30号に掲載された「連載 池田家文庫・探訪（1）～（6）」（2005年4月～2006年2月）をとりまとめた冊子であり、一般の



方々にも、近世岡山の歴史・文化についてご関心をもっていただこうと企画したものです。お気軽にお読みいただき、楽しみながら「池田家文庫」にご関心をお持ちいただければ幸いに存じます。また、毎年一回秋には、岡山市デジタルミュージアム（岡山駅中央口前）で池田家文庫絵図展を開催しておりますのでお越し下さい。左側にある備前揚羽蝶の紋章は、備前池田家の家紋です。揚羽蝶が羽を広げた格好をしており、昆虫をモチーフにした家紋として、たいへん珍しいものです。

池田家と岡山藩
池田家文庫の成り立ち
重要文化財「信長記」
池田輝政の青春
信長の恒興宛朱印状
「名君」池田光政
「留帳」と「奉公書」
「御諫箱之書付」
光政と蕃山
岡山藩学校
閑谷学校
岡山後楽園
御後園諸事留帳
岡山城下町絵図
江戸時代の外交
朝鮮通信使と岡山藩
朝鮮八道図

探訪・池田家文庫 ©2008 Okayama University Library

発行日：平成20年3月1日発行

監修／執筆：岡山大学文学部・教授
倉地克直（くらち かつなお）

発行：岡山大学附属図書館
〒700-8530 岡山市津島中3-1-1
TEL 086-251-7322
<http://www.lib.okayama-u.ac.jp>

印刷：（株）広和印刷
〒700-0942 岡山市豊成3-18-7
TEL 086-264-5888
<http://www.kwp.co.jp>



池田家文庫絵はがき
岡大生協にて発売中



岡山大学
OKAYAMA UNIVERSITY

岡山大学附属図書館 池田家文庫ホームページ <http://www.lib.okayama-u.ac.jp/ikeda>

池田家文庫に関するお問い合わせ：岡山大学附属図書館（学術情報部学術情報サービス課参考調査係）
〒700-8530 岡山市津島中3-1-1 TEL 086-251-7322 FAX 086-254-6152